

光の子



No.87 2000. 5. 1.

- わたしを尋ね求めるものは見だし、心を尽くして求めるものは、
出会うであろう…と主はいわれる。(エレミヤ 29:13-14)



「いつぱいの春」

え・中島英子

「こどもの日」

こどもの日荒壁に合ふ利根の風

げんげ田にあそぶ子みんな光の子

五月光遠心力の子等駆けて

青空にいつもくちづけ鯉のぼり

天龍をうち据ゑて畦塗りにけり

登らねば山頂遠し二輪草

若葉風子等へ光を伸ばす窓

落合 水尾 (『浮野』主宰)

16回目の春に

竹花 信恵

先日、高校の卒業式に参列した。
「柔らかな日差しを浴びて春の気配を感じるこのよき日・」マイクから流れ出る祝辞を耳にしながら、いつの間にか変わっていく季節の不思議さと、いつの間にか大きくなっていった子どもとの月日が駆けめぐる。アツという間、と思いつつ、思いの質量はずしりと重い。「二歳から十八歳まで」という児童福祉法の範疇の、私たちの「家」としての働きに一つの区切りとなり、今春も三名の十八歳たちが自ら選んだ道に進む。関わる私たちは、やり残したこと、多さを心に残し、区切りを区切りと割り切れるものではない。彼らの持つ不安までも勝手に想像し、更に、失敗して帰ってきたときまで予想して、あれこれ考えてしまう。それらを、「大きなお世話」と胸を張って突き返し、社会への第一歩に自信を持って踏み出して欲しい。彼らが出ていった「空き」に次々と人所依頼が舞い込む。余韻に浸っている間もなく、次の出会いに備える。出会いの連続で、この家の働きの歴史が創られていく。

センセーショナルにとり上げられるに至らないことも、どれほど多いことだろう。
先日、小学生の頃からここで育ち、それぞれよきパートナーに出会い結婚した兄妹が、生まれたての赤ちゃんを見せに来てくれた。父、母としての顔に少々安心する。かわい、だけでは足りない親になる道を歩み始めた。「これからだよ」そう言いつつ、見守り続ける仕事に加わった。父、母として、在り続けることが並大抵ではないことを、家庭を創ることが簡単ではないことを、たくさんのお事実を、ずっと見続けてきた。育てるという大変さを、独りでは出来ないことをずっと感じ続けてきた。思い通りにならない苛立ちも、理解することの難しさも、そして逃げたい思いさえ味わうかも知れない。生まれてきてよかった、そんな喜びをたくさん味わえるこれからであることを心から願っている。

いている状況を感じる。
この春より、光の子どもの家に、もう一つ建物が建った。「子ども家庭支援センター」として機能を始める。私たちに出来ることは決して多くはない。自らの手いっぱい状況の上に見栄を張って出来ることでもない。児童精神科医の先生たちに力を貸していただき、多くの方に支えていただき、この家が、少しでも役立つことをふやしていく資源となるように、もちいられるように願っている。「ここにいます」「こんな私たちの所でよかつたらおいで下さい」というメッセージを発信し続けられる拠点でありたいと思う。
「木が多くて、いい庭ですね。」先日、見学に見えた方々が褒めてくださった。木どころか草もない田圃を埋め立てた土地に建てられた光の子どもの家である。その頃に語れる仲間がいる。ずっと前から応援してくださっている方々。そんな人々の中で顔も知らない方々も数え切れない。その方々の応援を得て、前に向かって、次の仕事に向かって歩みを進められることを改めて感謝したい。

2つの文化に生きる

21

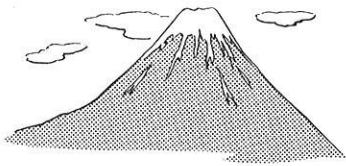
日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

Welcome to an Island. (ウェルカム トオ アン アイランド)
「ようこそ、島へ！」今年始めに聞いたきらりと光った言葉です。今までに数え切れないほど飛行機に乗っていますが、日本着陸前のパイロットのアナウンスの中であんなに素敵なアナウンスはちよつと聞いたことがありませんでした。アメリカの飛行機会社で飛んだのでアメリカ人のパイロットだったと思います。そういえば、私は日本の航空会社の飛行機で飛んだことがないので日本語での操縦士のアナウンスが入るかどうかは知りませんが、だいたいアメリカの飛行機に乗ると、合計で二、三回はフライトアテンダント以外に操縦室のパイロットからアナウンスが

入ります。気圧が不安定なので席に着くようにということから外の天気や景色にいたるまでです。そして、着陸前にこれから到着する場所の天気や状況などを操縦士が最後に説明してくれるわけです。そして、今回のパイロットがアナウンスした言葉のはじめがこうでした。「ようこそ、島へ！遠くには美しい富士山が見えます。」その表現の中に何と魅力的な響きのあったことでしょうか。私は思わずその言葉に聞き惚れてしまいました。(美しい富士山の見えるその魅力的な島に私は住んでいるんだ。)等と夢見心地でいるところを、飛行機はほとんど音も立てずに着陸しました。まさしくビューティフル ランディング、美しい着陸でした。美しい富士山がちよつと真ん中になるこの人口一億人以上にもなるこのエキゾチックともいえる島が日本という国です。ここを訪れ、住む人たちに心から「ウェルカム トゥアン アイランド」と胸を張って言いたいものです。

害賠償を求める訴えを東京地裁に起こした記事でした。話を読んでみるとそのジャーナリストは日本人女性と正式に結婚する予定だと書かれていました。私は「日本人と結婚している人は永住権をとるのはそんなに難しくないので、結婚後、永住権を取って住宅ローン契約をすればいいのに。なにも裁判所に訴えることはないんじゃないの。」等と安易な考えを夫にもらしました。夫は「いや、彼がしたこととはある意味では正しいと思う。日本人を家族としない在日外国人が永住権を取るのとは不可能に近いと言っているからね。彼は他の在日外国人のためにこの訴えを起こしたんだと思うよ。」ということでした。私は(なるほど、他の在日外国人のためにねえ。)と思いつながら、(そうだ、在日外国人のほとんどは韓国人なんだ。)ということともふと思ひ出しました。

である方々のために、でした。自分のように一時的に日本に住むかも知れないような外国人が五年に一度、指紋押捺をし、それが市役所に登録されるのは少しは屈辱であつてもまだ、耐えられることだが、親子三代日本に住み続けているような在日韓国人には、さぞ屈辱でしょう。それに当時、日本において指紋押捺を強制され、登録されるのか何か法的に罪を犯した人と外国籍人だけだったからです。
あれから十年以上たつて、今は外国人強制指紋押捺は何もなかったかのように姿を消しました。住みやすい日本に一步近づいたのかも知れません。美しい富士山があるエキゾチックな島、日本。「ウェルカム トゥアン アイランド」を心から言えるようにこの国がよい方向へ進んでいけるように祈りたいと思います。



利根川にて

彫刻家 中島 陸雄

手帳を広げて予定や行事を見る度に、何となく追い込まれるような気分で見入っているのは「展覧会搬入」という文字である。まだ先があるからと思っているうちに、自分の意識よりも実際の時間の流れの方が早く、作品の搬入の日が迫ってくるのである。

私は、利根川の絵を出品する事にして申し込んだ。展覧会の事務担当者の方では、それらの申し込みに従って印刷物などの仕事を、どんどん進めていっているはずである。

ところが、こちらでは肝心な作品が完成していない。手帳を見る度に何となくそわそわしなければならぬのは、それが原因なのだが、これといったものパターンとなつてしまった。早めに作品が完成して、余裕しゃくしゃくで搬入の日を待つという楽しさを味わってみたいものだ。

私は、利根川の現場で写生することからスタートする。その前に、キャンパスに少し濃いめのグレーで地塗りをしておくのだ。

利根川の南岸に登ってみると、思ったより強い風が吹いているのだ。

北西から川面を渡ってくる風は、簡単な三脚などあつさりとひっくり返してしまふ。私は、細い角材で作った杭を用意して、それを土手に打ち込み。そこに三脚の足をしっかりとしばりつける。そしてキャンパスを立てるのである。

これで一応の段取りはOKなのだが、描く私の体が寒いのである。私は綿入れのはんてんを着て、ビニールシートに腰を下ろす。

落ち着いて風景を見てみると、利根川は美しい。実に単調な流れだが、私はその単調さが大好きである。単調な堤防と堤防の間を、水が流れているだけである。急流もなければせせらぎの音などというものもない。静かに、音もなく左から右へ水が動いている。向こうには、うっすらと見える筑波山。

私はあつさりと形を取って、すぐ色を付け始める。太い筆で、大まかに塗っていく。最初の形は見えなくなつて、何だか判らなくなってくる。犬を連れた老人が通るかかった。

少し立ち止まり「うまいもんだね。」とほめてくれた。「どの辺を描いて

いるんだね？」と聞く。何が何だか分からない色面だから、どこを描いているのかわからない筈である。「あの辺です。」と筆で示すと、「へーえ。」と頷いてくれた。

ジョギングをする人も通る。友だちと一緒に歩いていく人もいる。

いつか、大きな恐ろしいような顔つきをした犬を引き連れた男の人が立ち寄った。「おれは、あの橋の所でラーメンの屋台を出しているんだよ。夕方からだけだよ。」と言った。

そのおじさんは、絵に大変興味を持っていて、色々な画家の名前を並べてみせた。そのうちに「あんた、エメラルドグリーンが好きだね。」と言う。そして、コバルトブルーがどうの、ターコイズブルーがどうのと言

い出す始末。このラーメン屋さんは、ご自分でも絵を描いているらしい事が分かった。しかし、「描いている。」とは言わない。描いているとは言わないけれど、エメラルドグリーンとかターコイズブルーなどという絵の具の種類は、普通は知らない筈なのである。これは、ラーメン屋が絵を描いているのではなく、画家がラーメン屋をしていると見るべきであらう。

いろいろな人に出会うものだ。いつか武甲山を描いているときだった

おしくなり、毎日を水をやった。ところが、ある月曜日に花も葉もしおれてしまっていた。何かとても悔しかったが、そのまま少し長い出張に出かけてしまった。日日草のことなどすっかり忘れて出張から帰ってみると、何と日日草は元気を取り戻しているではないか。秘書のAさんが水をやってくれたのだ。

彼女にこの次第を話すと、日が当たりすぎたのではないかという。残念だったが机の上に置くのは諦めて、日があまり当たらない棚の上に戻した。

しかし、その後日日草にあまりよいことはなく、葉はそのうちにすっかり丸まってしまい、まるで老女のようになってしまった。そして花は毎日散ることも、咲くこともなくな

り、日日草ではなくなってしまった。花の咲く頻度はだんだん間遠になり、しかも咲いてくる花びらは次第に小さくなっていった。何とかわいそうなことに、真っ白な花弁の一部に薄汚れた黄色い色まで付いてしまった。

しかし、彼女は懸命に生き延び、最後に咲かせた小さな花は一ヶ月近くもつた。もう散ることもなく、枯れていこうとしたので、花びらをとってやった。なぜか、家の猫をな

が、見知らぬ男の人が私の後に立って、私の筆の動きを見ていた。そのうち、我慢が出来なくなつたと見えて「あのね。」といいだした。「油絵というのはね、もつと厚く塗るもんだよ。山は輪郭線を強く描けば、もつと浮き出るよ。」などと教えてくれる。「わたしはね、新宿の区民展で金賞を取つたんだ。」という。相当な腕の人なのだろうが、私はその助言には従わなかった。

ところで利根川だが、立春が過ぎたばかりなのに、土手の南面にはカラシ菜が青々と生えている。描くことに飽きてしまうと、このカラシ菜を摘むのである。家に持ち帰り、塩漬にして食べる。これも楽しいものである。

通りかかったおじさんは私に忠告してくれた。「カラシ菜もいけどね、気をつけないと危ないよ。犬がたくさん散歩してるんだから、汚いんだよ。犬の糞だよ、ね。」

いやはや、それは知らなかった。



くしたときのように淋しかった。すっかり枯れてしまった日日草を入れた鉢はまだ机の下に置いたままになっている。



譲ってください

この度若柳慶雅師匠のご厚意により、人の愛に出会うこと少なく育ってきた小学二年生の藤山美季が、若柳流の日本舞踊を教えていただくことになりました。

日本舞踊のための衣装をお譲りいただける方を求めています。ご一報を！

佐藤家 美季担当

市川 美穂

☎〇四八〇・七二・四六九九

学もどきのつばやき ④2

時代の子

山形大学医学部

教授 仙道 富士郎

次第にそれが溜まっ
ていき、体調を壊
してしまうという
結末が待っている。
最も、飲酒とい

う悪習も体調を壊すのに大いに役立っていることを白状しなければならぬのだが。下手の横好きのテニスが、連続する仕事を遮るオアシスになってはいるものの、これとて身体の調子を取り戻すには格好の道具なのだが、心の空白は簡単に埋めてくれない。

最近になって、何か無性にむなしく淋しくなってしまう時がある。一体、自分の生とは何だったんだろうかと。さりとて歌舞音曲の趣味を持

てるわけでもなく、気がつくともボーとしていたりする時がある。
そんな時だった。

愚妻は草花が好きで、たまの日曜日に、自然屋長兵衛という名の園芸店に運転手としてついていて所在ない時間を過ごしていたのだが、ある時、真っ白い可憐な鉢植えの花が日に入つて、なぜか「この花を教室に飾る」といって大学に持ち帰り、空いた棚の上に置いた。

花びらは花柄の途中のくびれから毎日のように散っていく。そして新しい花がそれに替わって次々と咲いてくる。この様から、日日草というのだと後で聞いた。

棚から物書きをする机の上に移すと、原稿を書いている途中で考えを纏めようとするとときいつも花に眼がいくようになってしまった。

待てよ、と思った。毎日花が咲いて来るといことは、成長がものすごく早いわけで、朝から昼になるまでの間につばみから満開へと変わっていくはずだ。朝来てよく見て、昼にまた見ると、確かにそうであることが分かった。何と私はズーと花を見続けているはめに陥ってしまった。

と、花が見ている間に少し開いたような気がした。なぜかとても深い感慨を覚えた。日日草がとてもいと

プ・リ・ズ・ム

光の中で

佐藤家

眞璃ちゃんの入所前、少しでも彼女の不安を取り除こうと、恒例になった事前面接―顔合わせ―のため乳児院を訪ねたときのことです。その保育士の方に「お家の方は、何か用事がないと来なくて、減多に来ないから眞璃ちゃんも泣いちゃって・・・」と報告を受けました。

そして入所当日。お互いの不安が寄り添わせたのか、一心不乱におやつを食べていた彼女を父が膝に乗せました。ややぎこちなさは伺えましたが「初めて抱っこしました。」という父の笑顔に私も感激しました。卯南ちゃんの母も、こちらで泊まっていた下さるようになり、「ママ、今帰って」などと意地悪を言われながらも「泣かれないで抱っこできる今が、とても幸せ。」とおっしゃっていました。

そして、長い年月ずっと帰省できなかった萌季ちゃんが、初めて父の家へ帰省できた今年のお正月。



子どもたちの季節

仙道家

吹く風も暖くなり、春爛漫です。この季節、我が仙道家で二人の子どもが、悠子は推薦で、一志は一般入試でそれぞれ見事県立高校に合格しました。

二人にとって、受験を前にしたこの数ヶ月は、プレッシャーに押しつぶされるような時期でした。

一志は、志望校を決めるについても、とても迷いました。「落ちたらどうしよう」その不安は、ずっとあったと思います。

「A校だったら、今の調子でいいんだが、B校だと分かんないんだよ。やっぱりA校にしようかな。」と、第一志望校をB校にしていたのに、校内テストの結果が上向きでない、そんなことを言ったりしました。

入所前は、「関係ない」と素っ気

入所に至る過程で、複雑になって

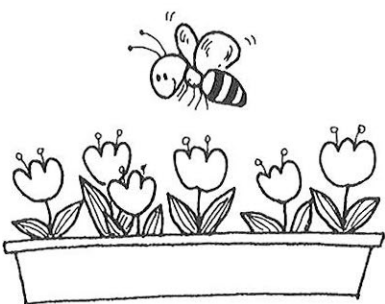
しまった親子関係をほぐし、再び関係を創り直していく手伝いをする

ことも、この大切な働きの一つです。どの子どもも、親を慕う気持ちは変わりありません。けれど、状況が素直な表現を封じ込め、泣いてしまったり意地悪を言ったりしてしまうのです。そんな我が子の「拒否」に出会ってとまどう親に、子どもの切ない思いや拙い表現を出来る限り代弁し翻訳して関係づくりを応援します。担当者との関係が安心できるものになれば、親子関係にも波及するので、共に前向きに取り組めるよう話し合います。

けれど、どんな話し合いより著しい子どもの変化・・・「パパ」と呼びかけるときのニッコリ笑顔や懸命に走って追いかけてくる姿が、何よりの特効薬です。

“どんな人間も変わるんだ”と言うことは、感動であり、大きな励みです。

岩崎 まり子



なかった一志ですが、十一月にメンバーに加わったばかりの梨江のところに毎晩やってきて、「梨江ちゃんいい子だね。」と、添い寝して情緒の安定に一役買っていました。

年末にお祖父さんが亡くなるという悲しい出来事もありましたが、年が明けてからはますます勉強に取り組みを強めました。そんな中でもちよつと疲れると、梨江の所に来て、一緒に遊んだり、抱っこしたりしていました。時々、機嫌の悪い梨江に、「一志君、ヤダ！あっち行って。」と言われても、それさえもかわいく思えてしまうようです。

一志が高校合格することが出来たのは、一志の努力と、夜遅くまでつきあってくれた指導員たち、そして梨江のおかげでしょう。池田 祐子

河のほとり

倉澤家

今年度倉澤家から四人の子どもが出発した。

高校を中退し、すでに北海道で生活している勇。長い入院生活を終え、自立をめざし別の施設に移る嬉。そして高校を卒業し、新聞奨学生として進学する潔と亜綺羅。しかし、誰ひとりとして安心して送り出せる子どもはいない。早くも仕事を辞めたいと言っている勇。この先果たして自立が可能かどうかかわらない嬉。進学は決定したものの、依存心ばかりが育ってしまった甘ちゃんの二人。全員が一〇年以上光の子どもの家で生活してきた子どもたちである。自立をめざしてきたはずが、いつの間にか自立を妨げるようになっていた私たちのほたらき。

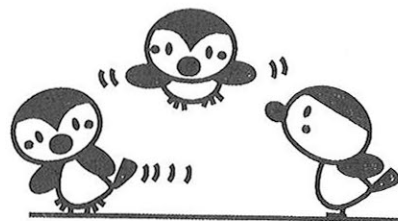
毎年卒業生を送り出すたびに「自立」について考えさせられる。本当の親でないことが、彼らを過保護にしてきたのではないだろうか。愛ある厳しさこそが彼らには必要だったの

ではないだろうか。

一八歳までという限られた時間の中で「自立」させ安心して送り出すためには、子どもたちが入所してきたその日から「自立」を意識した取り組みを始めるなければ間に合わず、それでも足りない分は卒園後も決して彼らを忘れずに、彼らにとって家族であり続けることしかないのではないか・・・と思いつめがらせている。

今年出発する四人の五年後、一〇年後に、それまでの私たちの取り組みの答えがどう出るか・・・恐ろしくもあり、楽しみでもある。

倉澤 智子



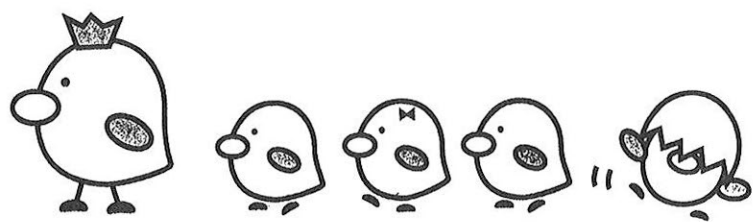
けるときは精一杯取り組んで、みんな無理しないで支え合っていけたらいいなと、心から思います。

世の中には、独りで悩んでいる人はどれくらいいるのだろうか。それを気づいて助けになって上げられる人はどのくらいいるのでしょうか。

「お互いさまですね。」

・・・春の夕暮れ時、花子とのやりとりをしながら、そんな思いになっていきました。

木部すなお



二〇〇〇年度四月から幼稚園に上がる花子ちゃんは、よく泣き、よく怒り、よく笑います。でも大概は泣いていることが多く、担当者を困らせます。

どうしてこんなことで泣くんだろう？くだらないよ・・・意地悪な心が私の内側でそう叫びます。けれど、だめだよ、花子にとっては重大なことなんだよ、と考え直し、話を聞くために向かい合う。しかし、本人はその頃は泣いて泣いたのが不明になっているようです。

だったら、笑わせちゃおう！と思い立ち、抱き上げてくすぐったり回ったりします。「花ちゃん、泣く真似してるんでしょー！」と、おどけてみたりして、がんばります。最初はなかなか効果が出ないが、泣きやんでニヤリ・・・ヤッター！です。

でも、これは自分が元気なときだけしか使えない方法です。

人は、どんなに大切な人が困っていたとしても、自分自身が元気でなければ、励ましてあげることなど出来ないと思います。

だから、お互い様で、迷惑かけるときは思いっきりお世話になり、助

現場から

光の子たちと ⑭

藤本 曜子

春らしくなり、大利根町の強い風が和らぐ日には、子どもたちが園庭を元気に走り回っています。

今朝、ちよつと寝坊をして、みんなが朝食を食べ始めている時に着替えていた裕君。突然、「裕もおばちゃんとママに会いたいな」と言いました。いつも心のどこかで家族を思っている裕君。午後、車で出かけた時には、後部座席に座って、何やらおとなしくマップル（地図）をめくっているようでした。そして、ふと「これには裕のおばあちゃんち載ってないよね」というのです。彼のおばあちゃんの家は遠い北の国で、簡単に会いに行ける距離ではないのです。周りの子どもは家族関係を見ると、何だか胸が切なくなります。小さな心の中を大きく占めている家族への思い、でもそれが満たされることは、今のところないのです。

そのたびに思うこと。私たちがどんなに努力して補おうと思っても、やはり本当の家族への思いを埋めることは出来ない・・・。

この春卒業していく紅子ちゃん。彼女は家族に大きく支えられ成長

してきた子のひとりです。大変な努力家の彼女も、これまで何度か大きな壁にぶつかりました。その度に自分の力で乗り越えてきました。それが出来たのは、毎週毎に会いに来て応援してくれたおじいちゃん、何かあれば飛んできて、必ず相談に乗ってくださり「紅子ちゃんにはやりた

い事をやって欲しい」と励まし続け、力になって下さった叔母夫妻の存在があったからなのかも知れません。そんな彼女もこの春無事希望の大学に合格し、四月からは大学生です。

将来、国際的に活躍することを夢見て、この一年も相当な努力をしてきました。一見意志が強く、しっかり者の彼女も、内面はとても繊細で、睡眠不足や精神的な疲労が体調に影響することも少なくありませんでした。それに加え卒業後の経済面での不安もいつも抱えていたことと思います。でも彼女は決して妥協することなく、合格切符を手にしたのです。私が光の子どもの家に勤めて初めて担当した三人の子どものうちの一人で、私もはじめての卒園生を送り出すことになります。

もうひとりの受験生の悠子ちゃん。

彼女もこの一年で驚くほどの成長をしました。彼女の中学三年の始まりは、机に向かい落ち着いて学習に集中すること、内容よりもそれが課題でした。ところが一年経ってみると、隣にいなればひとりです。学習で自分なりに頑張りが、自分の部屋で自分の机に向かい、誰に言われなくても、黙々と学習に取り組む姿が日常的になったのです。悠子ちゃんには、元実習生の内田さんという、二年前から悠子ちゃん専属の学習ボランティアとして毎週火曜日に必ず来てくださっている方の存在がありました。内田さんと私とで毎週連絡帳を書い

ているのですが、はじめの頃のノートを見ると、二時間の学習時間の中で、教問しか問題に取り組めない日が珍しくなかったのです。内田さんもまた大学への編入試験をめざす受験生だったので、内田さんの毎週二年間欠かされなかった悠子ちゃんとの学習、一緒にがんばろうと寄り添って下さった事が、悠子ちゃんの大きな力になったのだと思います。人との出会いや人間関係の中で、人は大きく変化するのだと実感させられます。

この春、新しい道に進むみんなに、素敵な出会いがありますよう祈っています。

日本小型自動車振興会補助事業完了のお知らせ

この度日本小型自動車振興会から、平成11年度補助金の交付を受けて、左記の事業を完了しました。ここに事業完了のご報告を申し上げますと共に、日本小型自動車振興会を始め、ご協力になりました関係各位に謹んで感謝の意を表します。

記

1. 事業名 平成11年度地域交流ホームの新築補助事業
1. 事業の内容 社会福祉法人光の子どもの家「子ども家庭支援センター」及び学習室兼集会室新築整備
木造二階建一棟
317.84平方メートル
1. 事業費総額 52,669,886円
1. 補助金 40,000,000円
1. 施設の名称 福島勲記念館
1. 施設所在地 埼玉県北埼玉郡大利根町砂原277番地
1. 完了年月日 平成12年3月15日

社会福祉法人光の子どもの家
理事長 飯田 進

養護メモ 82

急がないで

菅原 哲男

毎年のことなのだが、年度の終わりは中高生の進路が具体化し、これまでの取り組みの総括を迫られる。

この春も三名が高校進学を果たし、光の子どもの家始まって以来の二名の大学、一名の専門学校進学が実現した。

高校へは一〇〇%進学を実現してきてはいるが、中には願いが届かず想像を超えるマイナスの方向に流れていってしまう子どももいる。

乳幼児期・特に三歳までの生活のなかで、激しい不安や残酷な経験等をしてきた子どもたちの心の深傷があるいは親からの遺伝的な負因などが思春期に吹き出すように一斉に表現されて、自らの生涯の大きな出発を大きなマイナスに落とし込んでしまふ例が少なくないのである。

例えば親たちがシンナー禍の最中に妊娠出産された帆足鷹文の中学三年夏の異常行動から始まる高校二年時の行為障害の発症。同じように親たちが覚醒剤禍中に妊娠出産された高山嬉の高校二年生春の激しい暴力的表現に始まった人格障害の発症。菅野圭樹博士のご尽力により、大学

進学も決めて少しずつ克服しつつある、御津義慈の高校一年夏の精神障害の発症。幼い頃から時折見られたが、中学二年頃から人間関係の不調が一層ひどくなり、よりよい進路を選択できるよう、臨床心理士、児童精神医、中学教師たちの協力を求めながら数回の話し合いをもつて対応してきたが、家出放浪をくり返し、とうとう暴走族と関わり合っ事件を惹起して逃走を続け、少年鑑別所から家庭引き取りになった矢代珠美などなどである。

心の病の発症が、何によってもたらされるのかについて未だ定説はない。しかし、耐えられない衝撃を加えられると頑強な筋肉や骨格でも損傷を受けて病に陥るのだ。だから、心にも同じような衝撃が加われば損傷を受けて発病するだろう、という後天的な障害・疾病ととらえるものと、遺伝的な負因によるものとに大別される。そしてそれらは相互に干渉し合っそれがどの様に障害や疾病をもたらした基因なのかはについては判然としないのである。

だから、特に生活を共に創る担当

者にとって思春期のマイナス行動には心強い痛むのである。担当者としてはもちろん、責任を負うべき児童養護施設の職員たちにとって、思い当たる事どもの数は関わった時間に比例するのである。その悔恨の累積がここでの経験の高である。

一月の終わり、十九歳を過ぎて二〇歳を目の前にした高山嬉の自立を新たな施設でめざす「出発の会」が行われた。

四歳の終わりまで乳児院で育ち光の子どもの家へやってきた高山嬉は、かわいい幼児・小学期をここで過ごした。小学五年生頃から運動面での素質を表現し始め、町の剣道クラブでは月例の大会で毎月のように優勝し、中学時代は中距離走で県大会出場常連だった。家族関係を掘り起こし、母と結婚をした継父との暮らしを始めるように何と効果を上げ始めていたが、彼が中学一年時に継父を、高校一年の春に母をそれぞれ異界へ送ることになってしまった。まさに天涯孤独となってしまうのである。そんな彼が高校の体育科に入って、将来は箱根駅伝を走りたいと希望に燃えていた。そして高校二年夏の発症である。それから二年間のほとんどを入院闘病している間に、児童福祉法が似合わない年齢

になってしまったのだ。

「出発の会」には、元職員、東大官教会の教会学校の教師たちや富士見乳児院で担当した宇波保育士など彼に関わる多くの人々が集まって賑やかにそして、心豊かに行われた。

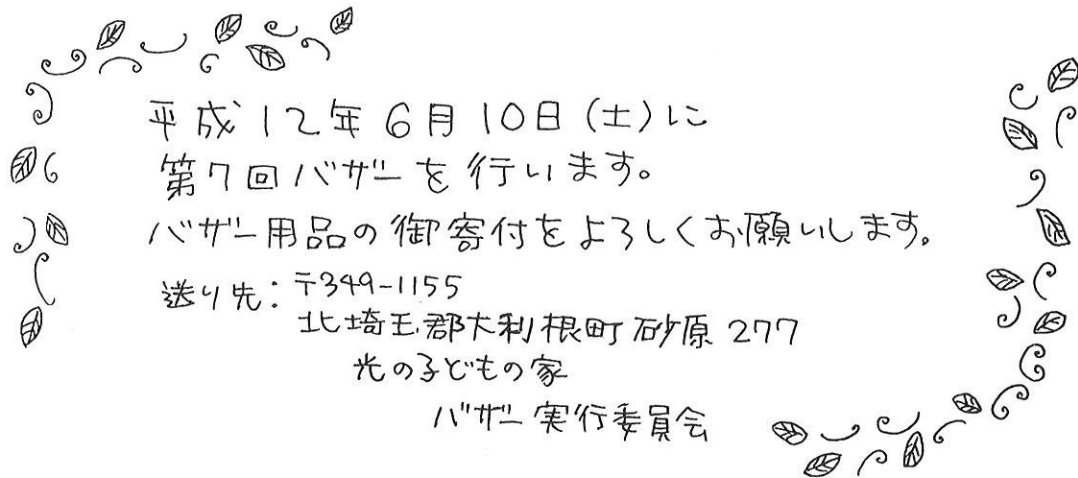
そんな光景の中で、彼との関わりが十数年間が次々に思い浮かび、私は彼の何に役立ったのだろうか、彼がここでの生活は一体どんな意味があったのだろうか・・・と心ふさがれてしまったのである。

そして、幼い頃には、あれも出来るように、これも克服するように、回り道をするほどの余裕などこの子どもたちにはないのだから・・・と職員たちや子どもたちを急かし続けてきたこれまでの関わりが、恨めしく思えて仕方がなかったのである。

三月十三日。十五回目の年度末。一番最初にやってきた子どもたちが高校を終えて出発していく。

たくさんの方々が集めた「出発の会」で、「淋しくなります、もうここへ来る理由がなくなつて・・・」と、涙ぐむ彼ら三名の家族から大きな花束をいただいた。

こみ上げる中で、ごめんね、そんなに急がせて・・・もつとゆつくり、ゆつくり暮らし、育てばよかったのに・・・と、心から思ったのである。



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

12月1日 ▶ 2000年1月末日

- 12月 幼児 6名 小学生 6名 中学生 7名 高校生 11名
措置外1名(未自立)
- 2日 中央児童相談所児童福祉司来訪し、養育情報の交換
と協議
- 5日 第二アドヴェント
- 6日 原道小学校との連絡協議会
- 10日 光の子どもの家「子ども家庭支援センター」上棟式
- 12日 第三アドヴェント
- 13日 江森ヘヤーサロン整髪ご奉仕 感謝
- 16日 所沢児童相談所児童福祉司来訪して養育情報の交換
と協議
- 18日 聖学院大学ボランティア来訪して子どもたちと楽し
いひととき
- 21日 山尾啓千代田工科芸術学院合格
- 24日 クリスマスイヴ 夕食会とキャンドルサービス
- 25日 クリスマス ページェントと祝会を お友だち 家族
教師前職員など多くの関係者と楽しく
- 28日 おもちつき
- 29日 家庭帰省開始

今月の物品ご寄贈者 二本榎木幼稚園 大利根中学高校長
大利根東婦人会 タカラブネ 女子学院宗教委員会 稲留敦子
小林熊治 篠原敏雄 白石一男 コカコーラボトリング 黒沢健
一 小倉隆芳 大塚東一 本居宏一 丸山長義など多くの各位様

2000年1月

- 1日 元旦礼拝 本年第1食を全職員 残留の子どもたち
家族などと 決意を語り 梅沢しずくの会会長 金子
後援会会長などからのお年玉もたくさん
- 5日 恒例のお正月気分をぶっ飛ばそう会を荒巻幸子さん
とケンちゃんが来訪して それぞれの決意表明
- 7日 浦和児童相談所児童福祉司来訪し養育情報の交換と
協議
- 11日 小川優子男子出産 光の子どもの家卒業生の第一子
- 13日 岡谷美夏小児医療センターに入院
- 15日 大学センター試験 紅子と潔が受験
- 19日 中日ドラゴンズ愛甲猛選手より 色紙と恒例となっ
たチャリティコンベ益金を 感謝
- 25日 梶原完 市川美穂 服部紗絵子に2000年度採用試
験合格通知発送

今月の物品ご寄贈者 町内丸山長義 白戸幸男 荒巻幸子
オオタニ 杉本英夫 菅野圭樹 愛甲猛 アンヌアーレ
元和婦人会 株式会社ジャガー商会 神奈川県瀬戸吉蔵
飯田洋司 山形県斉藤光 栗橋町竹林 中島睦雄 タカ
ラブネ 駒宮肇の各位様 ありがとうございます
二〇〇〇年度も始まりました！皆さまの応援に比べられる
よう心して暮らしをつくり心を育て参ります(くら)

/// 反 射 光 ///

☆鯉のぼりが泳ぐ五月の空に子ども
たちがよく映えます☆五年ぶりの職員
退職で補充された新人職員が若い刺
激をもたらししてくれます☆この頃、自
分の子どもを虐待する親が激しく増
殖しています☆その対応のため児童
虐待防止法が成立しそうです☆被虐
待の子どもを受け皿は児童養護施設・
乳児院しかないことは意外に知られて
いません☆しかし、児童福祉法制定
当時の虐待の概念は、サーカスや見
世物に売り飛ばすことでした☆それを
基本とした現在の児童養護施設の体
制なので、昨今の自己中心の情動で
自分の子どもを虐待する親たちなどへ
の対応は、当初予想できなかったの
で極めて困難です☆科学信仰による
合理主義と市場原理の社会が到達し
た地点は人間性への信頼から乖離す
る方向を辿りました☆積極的市場原
理導入の社会福祉の行末が人間性か
ら乖離する方向ではないことを祈りま
す☆私たちは社会福祉の原点を見つ
め直し、子どもたちとこの年度を歩き
続けます☆乞う、ご支援！
(哲)